

## 現代社会における「幸福」と「不幸」

北條 英勝

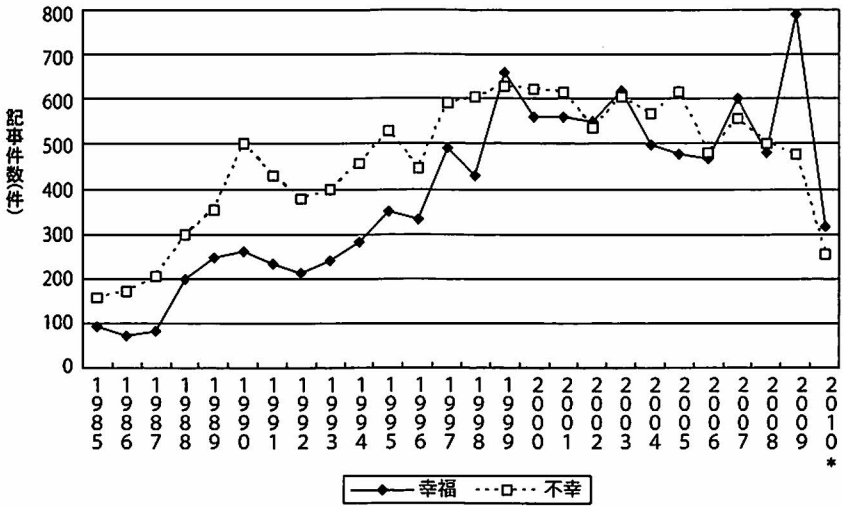
### 一 幸福をめぐる動向

近年、経済学、心理学、社会学などで幸福に関する実証的な研究が多数行われ、メディアでも幸福をめぐる議論が活発に行われている。一例として新聞報道に注目すれば、「幸福」という用語を用いた記事数は、二〇〇九年、急激に増加している（図表1）。

このような、幸福をめぐる動きの背景には、経済のグローバル化やニューエコノミーの浸透などによる経済的な格差の拡大や労働条件などの変化と、それに対応した社会生活と社会意識の変化などがあると考えられる。こうした社会的変動をふまえ、現代社会における人々の幸福と不幸のありようを検討することは重要な社会的な研究課題であるが、ここで注意しなければならないのは、「幸福なるもの」が人々の追求対象（幸福追求）

や、（学問的・思想的な）探求対象というだけではなく、政治的関心の対象・政治的争点になってきていることである。

例えば、政治の領域ではGNH（Gross National Happiness）などの指標が注目され、日本政府は、国民の「幸福度」を表す指標を開発しその向上に向けて取り組む姿勢を見せている。また、「最小不幸社会をめざす」とか、「最大幸福社会をめざす」といった言葉が飛び交っていることも、幸／不幸が政治的関心の対象となったことを表している。しかも、このような現在の政治的関心は、もはや客観的な幸／不幸や、幸福を追求する人々の選択肢・潜在能力の増大にとどまらず、人々の主観的な幸福の領域にまでふみ込んできている。例えば、内閣府が実施した平成二一年度国民生活選好度調査の目的は、「幸福度を表す新たな指標の開発に向けた一歩として、国民が実感している幸福感・満足感の現状を把握すること」「内閣府」であり、幸福



図表1 「幸福」・「不幸」というキーワードを用いた記事数の推移

(朝日新聞記事DB [朝日新聞「閲蔵IIビジュアル」] での検索結果)

\* なお、2010年の記事数は参考値で、6/18現在での記事数。なお、各キーワードでの記事検索にあたっては「幸福」と「不幸」を冠する特定の団体名など、固有名詞を除いて検索した。

感に関する様々な質問が盛り込まれている。ここでは、「あなたの幸福感を高めるために有効な手立ては何ですか」といった質問に典型的に見られるように、人々の幸福や不幸が数量的にとらえられ、しかも、政策によって増減可能な操作対象と見なされているのである。

## 二 幸福感の測定

幸福や不幸の度合いを測定する方法は、主観的幸福(幸福感)を測る方法と客観的幸福を測る方法とに大別されるが、最も簡単な方法は、人々の主観的幸福の度合いを調査票調査によって調べることである。具体的に言えば、「現在、あなたはどの程度幸せですか」といった質問をし、「幸せーやや幸せーやや不幸ー不幸」といった尺度で回答者に自身の幸福感を評定させ、回答してもらった方法(評定尺度法)が挙げられる。幸福に関する実証的研究の多くがこの方法を採用しているが、評定尺度の作り方には多様性がある。多くの場合は、五段階ないし七段階の評定尺度を用いるが、前述の平成二一年度国民生活選好度調査では、この幸福感の尺度を0点から10点の11段階で質問している。

また、これまでに実施されてきた主観的幸福観に関する実証的な調査・研究では、一般的な幸福感だけではなく、その下位概念として収入や家族や対人関係などに関する満足度(満足感)や諸要素も測り、各満足度や各要素が一般的な幸福感にどのく

らい関係しているのかも調べている。それらの分析結果によると、多くの場合、経済的要素よりも人との繋がりの方が一般的な幸福感を高めるといふ。つまり、経済的な満足感よりも家族や対人関係が良好であることの方が人々を主観的な幸福に導く可能性が高いということになる。

「人々の幸福感の向上にとって、経済的要素よりも人間関係や社会関係が重要である」とする、この種の学問的知見は、現在では、政治的思想によつて利用されつつあり、経済成長なき時代の政治にとつて、大きな魅力をもつものになつてゐる。そのため、おそらく、こうした先行研究の成果をふまえ、平成二一年度の国民生活選好度調査は、幸福感に影響する諸要素を検討し、経済的要素よりも人間関係・社会関係の方が重要であることを確認しようとしたのであろうが、結果的には、①健康六九・七％、②家族関係六六・四％、③家計状況六五・四％（複数回答で選択、四位以下略）という順番であり、家計状況の影響も無視できない値であつた。<sup>(4)</sup>

### 三 幸福感調査の諸前提

このような主観的な幸福感の度合いと種々の満足度などを測定した調査結果は、現代社会における幸福と不幸のありように関して様々な知見を与えてくれるのであるが、その分析上の諸前提を問い直すことは社会的に重要であると考えられる。なぜなら、もはや幸／不幸が学問的な関心の対象にとどまらず、

政治的関心の対象になつてゐるからであり、また、幸福感についての調査が、幸福についての特定の見方（幸福観）や特定の社会哲学を暗黙のうちに領導しているからでもある。すなわち、個々の人々に対して幸福感を質問するということの中には、諸々の仮定が前提にされてゐるのであり、それらは暗黙のうち、ある幸福観や社会哲学——個々人の幸／不幸は数量的に測定可能であり、個々人の幸／不幸の総和が社会の幸／不幸を表すと考えるような社会哲学——を伴つてゐるのである。言うまでもなく、この幸福観や社会哲学は、J・ペンサムが一九世紀に定式化した「最大多数の最大幸福」という考え方に基いてゐる。これは、ある社会の構成員たる個々人の幸福を量的に把握し、その総和が当該社会の幸福を表してゐると見なす考え方であり、宮原が指摘するように、均質ではない幸／不幸に関する主観的な個々人の経験を、ある種、暴力的な形に変換する考え方もある。言わば、幸福感に関する調査は、幸福を量的に把握するというペンサムの考え方を具現化する手段を提供してゐるのである。しかも、社会学の有力な基本的概念（存在被拘束性）に照らせば、個々人の置かれてゐる社会的諸条件によつて個々の幸福観は質的に異なると考えられるのであるが、この質的に多様な個々の幸福観は、数量化の社会哲学のもとでは、均質なものの、質的に等価なものと思なされることによつて、質的多様性を剝奪され、数量として把握されることになる。このような、幸福感を測定しようとする調査（とりわけ、

学問的な問題関心から生じているわけではない世論調査) がある仮定には、大別して以下のものが挙げられるだろう。<sup>(5)</sup>

(1) 誰でも幸福や不幸を日常的に感じており、質問されれば、今どの程度幸福／不幸なのかを簡単に回答できると仮定されている。

(2) 幸福や不幸について質問するのは当然のこととされている。

(3) 幸福感の測定にあたり、幸福と不幸との対称性、線形的関係が仮定されている。

(4) 調査者が作成した評定尺度を用いて、回答者の誰もが同じように幸／不幸を評定できると仮定している。

(5) 個々の幸福感はどれも等価であり、幸福感の平均値を計算可能だと仮定している(例えば、平成二一年度国民生活選好度調査の結果では、幸福感の平均値は六・四七とされ、幸福度「5」を選択する者が多いほか、デンマークや英国と比べ低い点数をつける者が多かった「内閣府」という)。

幸福感に関する調査が有する、これらの仮定・前提は、一見些末で技術的な事柄に見えるかもしれないが、特定の幸福観と数量化の思想とに基づいている。しかも、幸福感を測るための方法・技術的操作と一体であるために気付かれにくいものである。そのため、これらの仮定によって、方法的に特段の問題がない場合ですら、正確に測定しているはずの人々の幸福感を取り逃がし、結果的に、紛い物を測ることになっているのでは

ないかとも考えられる。以下で、それぞれの仮定・前提を簡単に検討してみたい。

(1) 誰もが幸福や不幸を日常的に感じているわけではなく、日常生活で幸／不幸を感じる頻度には人によって違いがある。実際、調査対象者全員に「現在、あなたはどの程度幸せですか」と質問した場合に、少数とは言え無回答が存在する。また、幸／不幸の度合いだけでなく、「幸／不幸どちらも感じたことがない」という選択肢を用意した質問の場合には、この選択肢を選ぶ回答者がいる。とすれば、幸福感の度合いを調査対象者全員に一律に質問した場合には、(幸／不幸を普段意識していない回答者の多くはその場で回答を作ってしまうのだが) 結果として、幸福感に関する質的に異なった回答を混ぜ合わせていることになる。

(2) 「あなたはどの程度幸福ですか」といった質問は、かなり親しい関係でもない限り、日常生活ではほとんど聞かれることがないような質問である。そのため、調査における社会関係(調査者―被調査者関係)においては、日常的に幸／不幸を感じているかどうかによって、回答にバイアスが生じやすくなると思われる。

(3) 幸福感の度合いを数量化するためには、幸／不幸の度合いを評定尺度化することによって、幸福と不幸とを対称的なものと見なし、その線形的関係を想定することになる。しかし、日常会話の語感において、幸福と不幸とは対称的な関係には

なっていないことから考えると、人々にとつての幸／不幸の感じ方（測り方）は、そもそも非対称的なのではないだろうか。例えば、大村英昭が指摘するように、「薄幸の佳人」とか「幸が薄い」とは言われるが、「幸が濃い」とか「不幸が濃い」という表現は一般的に使われないし、「幸福の絶頂」とは言うが、不幸の場合は「絶頂」ではなく「どん底」と表現されるのであり、幸福と不幸が単純な二項対立概念としては使用されてはいない。この幸福と不幸の非対称性は、単に語感だけの問題ではなく、人々の日常生活における幸／不幸のとらえ方・感じ方に係っているのだから、人々に質問することによつて回答を聞き出す方法、つまり、調査における幸福の測定の場合には、とくに重要な問題であると考えられる。すなわち、人々の幸福の度合いを調べるために調査者が作った幸／不幸対称の評定尺度は、調査対象者にとつて異質で外的な尺度なのである。調査での幸／不幸の測定は最終的に回答者自身の評定に依存するのであるから、調査で用いられる尺度と回答者自身の日常的な尺度とが離れているほど、正確に回答できなくなる可能性が高まると考えられる。

(4) 幸福の度合いを尋ねる質問に正確に回答するためには、質問で要求されている測り方（尺度）を理解し、その尺度に合わせて自己の幸／不幸感の変動可能域の上限と下限とをふまえ、現在の幸／不幸の度合いがどのくらいなのかを評定する能力が必要になる。そのため、要求されている測り方が複

雑で、日常生活から乖離しているほど、要求通りに回答できなくなる者が増加すると考えられる。例えば、前述の平成二一年度国民生活選好度調査では、幸福の尺度を11段階の等間隔の評定尺度（とても不幸を0点、とても幸せを10点とする単尺度）で質問しているが、回答者の誰もがこれを理解した上で、自己の幸福感を正確に評定できるのかはかなり疑わしいのではないだろうか。

(5) 幸福感に関する調査は、人々の幸福の度合いを質的に等価なものとなし、最終的に平均値を計算する場合がある。しかし、幸福の度合いを評定する際の参照基準には様々な要素があり、誰もが同じ基準で幸福感を評定しているわけではない。ある人は自分の理想とする状態を想定して幸福の度合いを評定し、別の人は自分の過去の経験や将来の期待や不安に基づいて評定したり、周囲の他者と比較して自己の幸福の度合いを評定したりする。このように、人々の幸福は質的に異なるにもかかわらず、それらの質的な差異は大きな問題とは見なされず、基準の違うものを同じ尺度で測られた度合い（幸福度）として、誰にとつても等価なものとしている。

#### 四 幸福指標の社会的機能

——平均的幸福の実体化と幸／不幸の多様性の隠蔽  
幸福感に関する調査では、以上で述べてきた様々な仮定を前

提とすることで、幸福感の度合いが数量的に測られている。この作業過程によって、日常生活を生きる人間の感覚や意識のうちでは言語的・質的に把握されているであろう幸／不幸の状態や、その状態に関する感覚・意識は、数量的な度合いに変換されるのであるが、それは人々の幸／不幸の状態をありのままにとらえているのではなく、特定の幸福観からとらえた幸／不幸のありようの一側面を表現しているに過ぎない。しかし、こうして得られた調査結果は、幸／不幸の質的な多様性を隠蔽し、「平均的な幸福感があるのだ」という見方を醸成していくことに寄与する。しかも、こうした調査結果が公表されると、数値が一人歩きをはじめ、数量的な幸／不幸がリアリティをもっていかのように実体化して受けとられるようになる。実際、平成二一年度の国民生活選好度調査の結果が内閣府から発表されると、各マス・メディアが一斉にその調査結果を報道したが、例えば、朝日新聞は「日本人の幸せ六・五点」との見出し記事で報道し、幸福度の平均値を「ある典型的日本人の「幸福度」と表現している〔朝日新聞朝刊二〇一〇年四月二十八日付〕。ここでは、本来的に数量的な構成概念に過ぎない指標としての平均値が、何らかの实在性をもつものとして受けとられている。

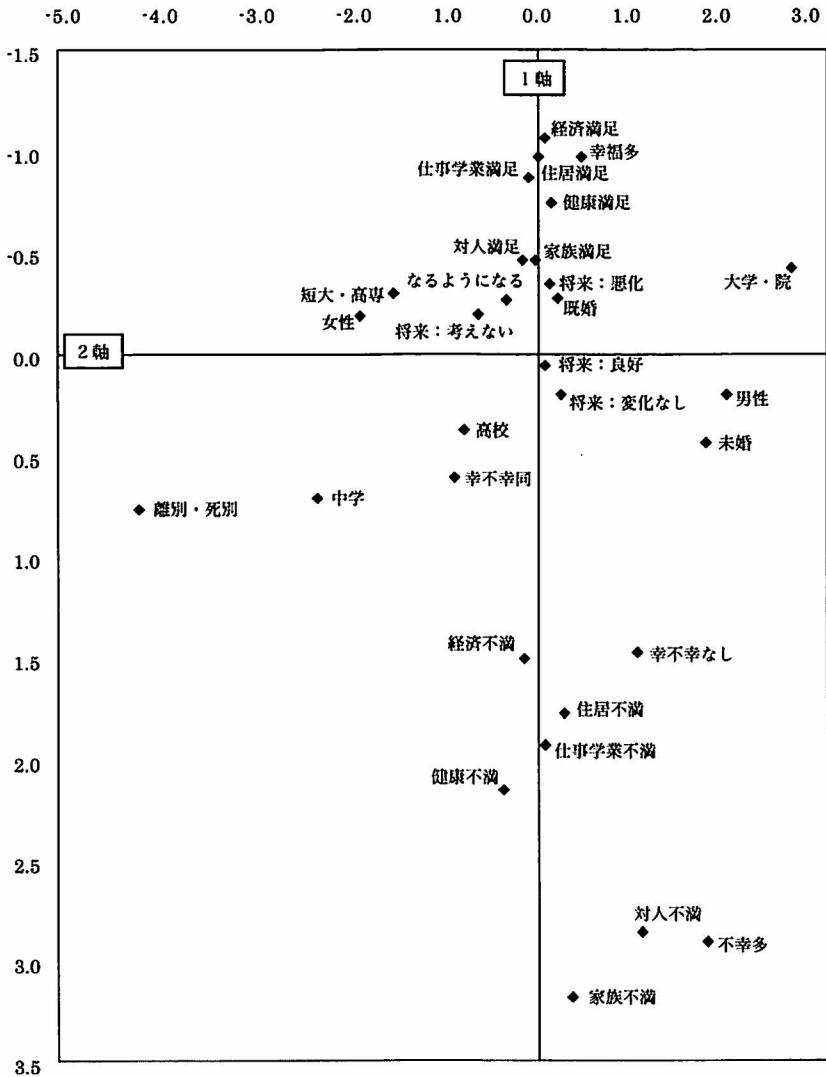
このように幸福感に関する調査やその数量的な指標化は、個人の幸福の総和から計算された平均的な幸福感を実体化し、現代社会を生きる個々人の幸／不幸の質的な多様性を隠蔽していく社会的機能を果たすと考えられるのである。

(1) 例えば、人間開発指数 (HDI: Human Development Index) や A・センの提唱する潜在能力 (capability) —— すなわち、人々が実行可能な生き方の集合——を増大させることが挙げられる。

(2) 最も典型的なのは、問4の「あなたのお考えに最も近いものに2つまで○を付けてください」と、問5「企業や事業者による次のような行動のうち、その職場で働く人々や社会全体の幸福感を高めると思うものは何ですか。最も重要と思うものに3つまで○を付けてください」、そして、問6「国民全体、社会全体の幸福感を高める観点から、政府が目指すべき主な目標は何だと思いますか。最も重要と思うものに5つまで○を付けてください」という三つの質問である。これらの質問は、明らかに、人々の幸福感を政策によって操作しようという意図が表れていると言えよう。

(3) 具体的に言えば、平成二一年度国民生活選好度調査では、問1で「現在、あなたはどの程度幸せですか。」「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけ○で囲んでください」と質問し、0点から10点までの一段階の評定尺度を採用している。

(4) なお、幸福感に影響する諸要素・諸満足度について、報告者らが東京都二三区民を対象に二〇〇六年に実施した調査データ(生活意識調査 [MGC・III]) を数値化Ⅲ類で分析したところ、これまでの研究とは若干違う結果が得られたので、参考までに記しておく(図表2)。主観的な幸福感を「幸福感」と「不幸感」とに分けて検討すると、幸福感／不幸感に確かに種々の満足感／不満足感と結びついているが、それらは必ずしも単純な関係にあるわけではなかった。数値化Ⅲ類で分析すると、似ている要素同士が近くに、異なった要素は遠くに位置付けられるが、この結果から言えば、①家族関係や対人関係に不満を抱く場合に不幸だと感じる傾向が相対的に強くなる



図表 2 MGC II における幸／不幸と諸要因との関係（数値化Ⅲ類による分析結果）  
 （第 1 軸：寄与率 = 16.1%、相関係数 = 0.53 第 2 軸：寄与率 = 7.9%、相関係数 = 0.37）

が、これらの満足感が高くとも幸福感は相対的に高くなるわけではない。他方、②経済状態や仕事・学業に関する満足感が高いと幸福だと感じる傾向は相対的に強くなるが、それらに不満であっても不幸と感じる傾向は相対的に強くない。言い換えれば、経済状態や仕事・学業の満足感は幸福感と強く結びついているのに対して、家族関係や対人関係の不満足感是不幸感と結びついている。したがって、現代社会における人々の主観的な幸福感は、格差の拡大や労働条件の変化の中で、経済状態や仕事・学業の満足感に強く影響されている一方で、家族や対人関係の不満が不幸感の醸成に関与しているのだと考えられる。この調査結果から言えば、経済状態や仕事・学業などの状態を向上させることは幸福感の増進に寄与し、家族や対人関係といった社会関係の改善は不幸感の減算に効果的だと考えられる。この分析の詳細については、あらためて別稿を用意する予定である。

(5) 宮原浩二郎「ニータチと幸福の高さ」『先端社会研究』創刊号、関西学院大学出版会、二〇〇四年、一〇七頁。

(6) とくく、世論調査の質問が有する暗黙の諸仮定・諸前提に関する研究としては、P・ブルデューによる諸論考が重要である。彼は、世論調査の政治的質問の前提と質問に対する回答行為とを分析し、世論調査が果たす政治的な機能を分析している [Bourdieu 1979 = 1990, 1980 = 1991]。また、調査の社会関係が有する諸問題についても詳細に検討している [Bourdieu et al., 1983]。幸福感に関する調査の諸仮定・諸前提についての本報告での検討は、これらブルデューによる諸研究を参考にしている。

(7) 大村英昭「幸福と不幸の臨床社会学」『先端社会研究』創刊号、二〇〇四年、二〇六一―三頁。

〔参考文献〕

Bauman, Zygmunt, *The Art of Life, Polity Press*, 2008 (高橋良輔・開内文乃

訳「幸福論——生きづらい時代の社会学」作品社、二〇〇九年)

Bourdieu, Pierre, *La distinction: Critique sociale du jugement*, Editions de Minuit, 1979 (石井洋二郎訳「ディスタクシオン——社会的判断力批判」I・II、藤原書店、一九九〇年)

Bourdieu, Pierre, *Questions de sociologie*, Editions de Minuit, 1980 (田原音和監訳「社会学の社会学」藤原書店、一九九一年)

Bourdieu, Pierre, avec Loic J. D. Wacquant, *Reponses*, Editions du Seuil, 1992 (水島和則訳「リフレクシブ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー「社会学を語る」藤原書店、二〇〇七年)

Bourdieu, Pierre, et al., *La Misère du monde*, Paris, Editions du Seuil, 1993

Crosby, Alfred W., *The Measure of Reality: Quantification and Western Society, 1250-1600*, Cambridge University Press, 1997 (小沢千重子訳「数値化革命——ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生」紀伊國屋書店、二〇〇三年)

Hacking, Ian, *The Taming of Chance*, Cambridge University Press, 1990 (石

原英樹・重田園江訳「偶然を飼いならす——統計学と第二次科学革命」木鐸社、一九九九年)

広井良典「幸福と人間・社会」『科学』八〇巻・三号、岩波書店、二〇一〇年、二九五―九頁

池田知加「人生相談「ニッポン人の悩み」——幸せはどこにある？」『光文社新書』二〇〇四年

池本幸生「GDPに代わる真の豊かさ指標を求めて」『科学』八〇巻・三号、三〇〇―一頁

北山忍「洋の東西で幸福感にどのような違いがあるか」『科学』八〇巻・三号、二六七―七五頁

高坂健次編「幸福の社会学」(放送大学教材)、放送大学教育振興会、二〇〇八年

見田宗介「現代における不幸の諸類型」『現代日本の精神構造』弘文堂、



一九六五年、一—五六頁。

見田宗介「まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学」河出書房新社、二〇〇八年

大石繁宏「幸せを科学する」新曜社、二〇〇九年

大石繁宏「幸せを科学することは可能か？」「科学」八〇巻、三号、二六二—六頁

重田園江「フリーターの穴——統計学と統治の現在」木鐸社、二〇〇三年

竹内郁郎・宇都宮京子編著「呪術意識と現代社会——東京都二十三区民間調査の社会的分析」青弓社、二〇一〇年

(ほうじょう・ひでかつ、社会学、武蔵野大学准教授)